学内研究組織成果報告（2023 年度）

子どもと教師が学びの意味を共創する地理カリキュラムの開発研究

Development of Curriculum for Co-creation of Geography Learning by Students and Teacher

宅島　大尭（Takushima Hirotaka）

本研究は，従来は教師が独占することが多かった学習目標・内容・方法・評価に関する権限を，子どもたちと共有して地理カリキュラムを共創することで，市民社会が抱える課題を子ども自身が見出し，それを追究する主体となること（地理教育の市民性教育化）をめざすものである。

2023 年度には，文献調査および二つの調査校（高校）において，学習目標・内容・方法・評価に関する権限を子どもたちに段階的に移行するアクションリサーチと聞き取り調査を行った。その結果，大きく以下の四つの成果を得ることができた。

第 1 に，学習評価に関する権限の移行について，教師の権力性の強い学習評価に子ども自身が参加することが，エージェンシーをともなった子どもたちの学びの主体性と，学びの真正性を担保する地理学習を促進できる可能性を示したことである。2 年間にわたり，合計 7 回実施された定期考査問題の「作題」に継続的に取り組んだ高校生を対象とする聞き取り調査を実施し，「作題」への関与についての意義や限界を引き出すことができた。その成果として「地理学習における『学習の評価（Assessment of Learning）』改革の可能性：定期考査地理 B の作題に取り組んだ高校生の語りから」を『社会系教科教育学研究』誌に掲載することができた。

第 2 に，学習目標に関する権限の移行について，「カリキュラム・ネゴシエーション」の概念を用いて，子どもたちが学習目標の設定に関与する「問いづくり」の開発と実践を行ったことである。2022 年度に試験的に実施したものに改善を加え，高等学校地理 B の「人口」および「都市・村落」の単元での継続的な実践を行うことができた。本実践は，学習目標だけでなく，内容・方法・評価に関する権限を段階的に子どもたちに移行する地理カリキュラムの共創の基盤となる可能性がある。この点については，アクションリサーチおよび子どもたちへの聞き取り調査を継続し，質的な分析を続けていく。

第 3 に，学習目標に関する権限の移行について，「問いづくり」の授業実践の分析結果を公表したことである。学会発表を行った後，地理学習において高校生がどのような「問い」を，なぜ「良い」と考えているのかについて，生徒たちの語りや作成した「問い」を基に明らかにすることができた。それらをふまえ，教師だけでなく生徒たちがもつニーズをいかに地理学習の一部とすることができるかについて考察した。その成果として研究論文を執筆することができた（投稿中）。

第 4 に，社会科教育における「主体的な学び」についての再考を行ったことである。新学習指導要領への移行にともない，「主体的・対話的で深い学び」が着目されているが，

社会科教育における「主体的な学び」に関するこれまでの議論と，学校現場で実際に開発・実践される授業との間には大きな隔たりが存在している。これに対して，どうすれば「社会変革の主体性」あるいは「政治的主体」を育成する社会科教育としての「主体的な学び」が実現できるのかについて,「カリキュラム・ネゴシエーション」を手がかりとして考察した。その成果として研究論文を執筆することができた（投稿中)。